

「ねえ、楓ちゃん、今幸せ？」

不意に呟かれた言葉に、高垣楓は反応できなかつた。そのせいで、楓は目の前に置かれたリブスターキに箸を伸ばしたまま、止まってしまった。しばらく経ってようやくなんて言われたかを楓が気付いた時には、志乃はワイングラスを傾けていた。ルビーのようなワインが揺れて、志乃を艶やかに飾っている。

「急にどうしたんですか？」

「気になっただけよ」

箸を空中で止めておくと迷い箸のように思われそうに、楓はさっとリブスターキを取った。取り皿に入れてから、楓はそれを咀嚼する前に志乃の言葉を頭の中で繰り返す。

今幸せ？

志乃の妙に甘ったるく、お酒が入った時に出すねつとりとした声の頭の中で反響している。

——幸せってなんだろう？

楓は、取り皿に入れた牛肉を見つめながら突いてた。美味しい物を食べているし、好きな日本酒も飲

んでいる。確かに今幸せと言うべきところだろうが、志乃の聞いた幸せの定義とはまた別の物のような気がしてきて、楓は幸せだと言うのが憚られた。元々、自己紹介や自分の考えを言うのは得意な性分ではないことも手伝った。

志乃の言おうとしていることを嘔み砕こうとしたが、楓にはよく分からなかった。普段であれば、そんなことを一々悩まずに言ってしまうのだろうか、お酒を飲んでいるせいか、いやに今日の楓は頭が回っていた。肉を突くの止めて、お猪口に入った日本酒をちびりと飲んだ。つんと日本酒特有の突き抜けるような感覚が舌の上を転がっていく。

楓が彼女を見ると、幸せそうな顔をしてワイングラスを傾けているところだった。楓の記憶が正しければ、そのワインは店に言って取り置きして貰っていた物だ。ここはそういったこともしてくれる。良い日本酒と良いワイン、両方を取り揃えている珍しい店で、楓たちの事務所の酒飲み御用達のお店になっている。初めにこのお店を見つけたのは、プロデューサーと楓だった。楓が志乃に教えて、それから

礼子や瑞樹と、順々にこの店のファンは増えていった。今では皆がオーナーと友達になつてしまい、良のお酒が入ると真つ先に教えてくれるほどだ。

「で、どうなの？」

「うーん、そうですねえ……ちなみに、志乃さんは幸せですか？」

「私？ そこそこ幸せかしら。最近はお酒絡みの書き物出来るし」

ここ最近の志乃は、ライブで体を動かしていることよりも事務所で書き物をしていることが多い。それがお仕事になつているため、事務所で飲んでいこともままある。事務所にいれば、ちひろに咎められているシーンも同じぐらい見られる。もつとも、志乃はあまり気にしていない。

そして、それなら。

「私も幸せですね。毎日楽しいですから」

彼女が聞いた幸せの中身、それは仕事に対してだったのだろう。それなら文句のつけどころがないほど、今の楓は幸せだった。モデルをやっていた頃もそれなりに幸せだったが、今より楽しくなかった。

アイドルの方が厳しいはずなのだが、モデルの時は周りがピリピリしていたおかげで精神的に辛かったことが多かった。単調な仕事が多いのも辛かったし、モデル同士仲が良いなんて稀なことだったからだ。

「ふーん」志乃はワイングラスを揺らして、ワインを酸化させる。「その割には深く考えていたみたいだね」

「幸せってなんだろうって考えてしまつて」

目の前に置いたままのリップステークを楓は口に運んだ。柔らかいお肉で、嚙むと肉汁がじゅわつと出て、舌で暴れ出す。丁寧に焼かれているからか、どの部位も柔らかく、抵抗はあまり感じられない。あつという間に一切れがなくなる。楓はお猪口を取ると、くいつと傾けた。辛口特有の匂いが口から鼻を突き抜ける。

「貴方って時々真面目よね」

「そうですね」

志乃はじつと楓を見ていた。彼女の茶色の瞳が楓を映して、楓は瞳越しに自分を見ていた。志乃が何を思つて、自分の目をじつと見ているのか、楓

にはまるで分らない。もしかしたら、酔っ払っているだけで意味がないのかもしれない。

「自分じゃ分かりませんね……あ、志乃さん。今日はどうしますか？」

「お邪魔するわ……」

そう言うと志乃は楓から目を離して、ワインに目をやった。撫でるようにグラスの縁をなぞつてから、志乃はグラスの脚を掴んで、中身を飲み干した。

S

「ただいま」

「私の家ですけどね」

ドアを開けて、楓はスリッパを二つ出した。あまり広い部屋ではないのとリビングにカーペットを敷いているので、スリッパの意味はあまりない。楓の実家がスリッパを使う家だったので、今でもその習慣が続いているだけだ。

「固いこと言わないの」

志乃は慣れた手つきで玄関の鍵を閉め、楓に続い

てスリッパを履いた。

「そういえば、志乃さん明日のお仕事は？」

「私は入ってないわよ。楓ちゃんは」

「私も入ってませんが、午後は事務所に用があります」

がちやりとリビングのドアを開いて、スリッパを脱いで入る。リビングに置いてある小さな冷蔵庫から水の入ったペットボトルを取り出して、志乃に渡す。

「ありがとう」

「いいえ」

楓は自分の分も取って、冷蔵庫を閉じる。お酒を飲んだ後に水を飲むと、二日酔いになりにくいと聞いているから、出来るだけ取るようにしている。明日は両者共に休みのため、二日酔いでも良いのだろうか、もし急に仕事が入ったら大変なので極力飲んでおく。「ふう……志乃さん、メイク落としは？」

「ああ、貰えるかしら」

開けたペットボトルの蓋を閉じてから、テレビの台に置いてあるメイク落としを取る。楓は容器から

冷夏の見込みという予報を裏切った夏だったけど、九月に入ると例年ほどの残暑はなく、今年は曆に沿った季節感を憶えることができていた。

夏が過ぎて巡るは秋。

事務所のラックに刺さる雑誌には赤や黄色中心の暖色が多くなってきたし、旅行雑誌はズバリ紅葉特集を押し出している。全国の紅葉狩りスポットを載せた見開きページを眺めつつ私は独りごちた。

「本命はやっぱ京都よね。あの青楓が真っ赤になつたら絶対綺麗だし。風情なら宮島も良さそうだなあ。神社と紅葉のコラボも素敵でしょうね。近場なら箱根や日光かな。ベタだけだ」

特集の紅葉写真を見ながら、ああでもないこうでもないと唸っているのは、トライアドプリムス三人での旅行計画を練っているからだ。話自体はGW明けから持ちかけていたのだけど、夏はイベントが多い時期でもあつて皆忙しく、また冬も同様の為、オフを合わせられそうなのは必然と秋になる。なので、言い出しである私はソファァーセットで二人を待ちつつ旅行雑誌に目を通していた。

しかし、読めば読むほど、紅葉狩りという案は現実的ではないという結論になってくる。

「紅葉のピーク、十一月下旬、なのよねえ」

ピックアップしたスポットの見頃は軒並み十一月の中旬から下旬。一般的には冬イベントに向けての準備期間となり、比較的休みも取りやすい時期だけど、ウチの事務所に関しては事象が違ってくる。

というのも、ウチの事務所が創立されたのが十一月二十八日であり、毎年この時期にはアニバーサリーイベントを行っているのだ。私は第一回目のメイんに抜擢されたのだけど、初めてだらけのことばかりでそれはもう目の回る毎日だった。今年の詳細はまだ決まっていないけど、事務所総出のイベントだから出番の少ない人でも遅くても一ヶ月前には準備を始めないとならないし、もしかすると今年CDデビューをさせて貰えた私や奈緒は去年より出番が増える可能性も考えられる。

当然アニバに参加しない、という選択肢はないから、オフをとるなら十月となつてくるけど、その時期だと紅葉にはまだまだ早すぎる。

「はあ、根本から見直さないとダメかなあ」

紅葉以外の秋旅行となると、次に浮かぶのは味覚でも、イベント前ってことで食べ物関係は気を遣いそうだなあ。かといってこの時期を逃すと、次は春まで時間取れなさそうだし。

「うーん、なんか良い案ないかなあ」

あちらを立てればこちらが立たない状況に疲れてきて、一度頭を休ませる為に雑誌を閉じてテーブルの上に投げ出した。

そのとき、応接コーナーを区切る衝立の向こうから現れた人影から声を掛けられた。

「おっと、先客が居たか」

「おはようございます、加蓮ちゃん」

「おはようございます楓さん、プロデューサーさん」

顔を上げた先にいたのは、事務所の所属アイドルの一人、高垣楓さんと彼女のプロデューサー。それぞれ手に手帳やノートパソコンを持っているところから、これから仕事の打ち合わせをするところなのだろう。ならば席を譲るのは私の方。

「今どきますから」

「済まん。丁度何処も使用中で、ここしか場所なくてな。ああ、急ぐ必要は無いぞ」

プロデューサーは向かいのソファアに、楓さんは私の隣に腰を下ろして、私の片付けを待つ。

「加蓮ちゃん、どこかに旅行ですか？」

テーブルの上の旅行雑誌に目を向けた楓さんが、私物を鞆に詰めてる私に尋ねてきた。

「これからの時期、温泉巡りが楽しくなってきましたよね」

「温泉もいいなあ。そういえば楓さん、前に凜と温泉行っていましたよね」

「ええ。露天風呂でお酒を飲みながら見る紅葉は最高よう。ふふっ」

「あ、あはは。そうですね。お酒は分かりませんが」

相変わらずな楓節だなあ。そう思いながら何とか言葉を返した私に、楓さんは何かに気づいた様子で真剣な表情となった。

「安心して。凜ちゃんには飲ませていないから」

「そこなの、心配するところ」

全然考えてない斜め方向の発言に、思わずタメ口になってしまった。素の言葉遣いはあまり良くないから、目上の人と話すときは気をつけるようにしているのだけど、楓さんと話すときは大抵こうなってしまう。良くも悪くも大人って感じがしない。彼女からもタメ口でいいとは言われているけど、プロデューサーもいるので、口調を整える努力は試みる。

「それは置いておくとして、やっぱり秋なら紅葉狩りですよ。前から凜と奈緒とで旅行に行こうと提案してたんですよ」

「あらそれは楽しそうね」

「で、それ見て良いなあと思っていたんですけど、ウチの事務所的にはちよつと無理だなあって」

「え、ウチの事務所、なにか問題があったかしら?」

「紅葉のピークって十一月後半じゃないですか」

「あー、アニバイベントか」

楓さんに代わって答えたのはプロデューサーさん。流石と言うべきか、時期の話を出ただけで私が言

いたいことを理解してくれたようだ。

「まだ公表できないが、例えばバクメン参加だけだとしても、衣装やフリの合わせやらリハやらでオフは取りづらいわな。ましておまえ達学生組は学業との両立も考慮しないとならんしな」

「そのあたりも考えると、今年は諦めるしかないかな、とも」

「アニバだけは年度計画に初めからあるからなあ。

残念ながら」

「はい。でもアニバが嫌ってことじゃありませんよ。アイドルのお仕事自体は楽しいですから」

整理の終えたバッグを肩に掛け、ソファから立ちあがると、ラックに戻すべく雑誌を取り上げた。

「じゃあ、カフェで凜達を待つことにします。お疲れ様でした」

「はい、お疲れ様でした」

「おう、サンキュな」

私を送り出した二人は、そのまま仕事の打ち合わせに入った。先程の会話ではないが、学生であることでなんだかんだと保護されている私達より、社会

時々、ふと考える事がある。

私はどこから来て、どこへ行くのだろう、と。

なんて、それだけだとまるで少年少女が抱えるお悩みみたいなものに聞こえるけれど、実際はこれといった意味なんて無い、取り留めもない一人遊びのようなもの。

別に人生の行く末なんてそんな大層なものではなくて、朝家を出て電車に乗って、今日の仕事はどこへ行くのかな——とか、そんなくらいだ。

もちろん仕事だっていきなりどこかへ行くだけなんて事はないのだから、行き先も内容も事前に解ってはいる。だからやっぱり意味なんてない、ただの暇潰し。

昔から人と話したりするのが少し苦手で、だからか一人でいる時間もそれなりにあつたりして。そういう時はよくなんでもない事をぼんやりと考えたりしていた。

思い返してみると、子供の頃からずっとそんな感じだったような気がする。

なんとなく地元の大学に通って、友達に誘われて

遊びに来た東京でモデルをやってみないかとこれまた誘われて、そのまま卒業したら上京して、そこからまた今度はアイドルにならないかと誘われて。

自分で言うのもなんだけど、我ながら随分とふわふわした生き方をしているものだと思う。

まさか日本中のお酒が集まるイベントがあるからとついて行ったら、あれよあれよという間にアイドルにまでなってしまうなんて、あの頃の私に言ったらどんな顔をするだろうか。

と、そういえば大学の頃にはもうお酒を飲んでいたのであった。一応、ちゃんと二十歳になってから飲み始めたような気がするけれど、初めて飲んだのはいつでどこだったか——

「……楓さん、聞いてます？」

ぱちくりと。

一瞬自分がどこにいるのか解らなくて二度三度と瞬きをしてみると、テーブルを挟んだ反対側に座るプロデューサーの困り顔が目映った。

低めのテーブルを囲うようにソファが置かれた事務所の一角。皆がよくお喋りをしていたりする場所

「……寝てませんよ？」

「そうですね。今日はどこで飲むかな、とかそんな事を考えてそうな顔でしたしね」

「少しわざとらしく小首を傾げてみせたりしたけれど、素知らぬ顔でスルーされてしまった。」

「こちらの事を解ってくれているような気がして、ほんのちよつとだけ嬉しく思ったりもするけれど、最近めつきりこういう事ではリアクションを起こしてくれなくなつた寂しさの方が、もう少し上回る。」

「最初の頃は——おっと、また脱線。」

「大丈夫です、ちゃんと聞いてましたから。主人公の男の子がクラスメイトの女の子に導かれて未来に行く話ですよ。」

「見事なくらいにこれっぽっちも掠つてませんよ。」

「せめて仕事に関係する事を言つてください。仕事に関係する事を」

「じゃあ私が小説家に……？」

「書くんですか？ 小説」

「素敵なマスターがいる喫茶店があれば、映画化も間違いないかと」

「あ、でもやっぱり小説を書くならどこかの旅館に籠もつたりするべきなのだろうか。旅館。温泉。あ、素敵。」

「そういえば最近はずつとお仕事が続いていたから、暫く温泉巡りも出来てないな——なんて、私がやって来るのを待つているであろう温泉に想いを馳せていると、プロデューサーがそれはもう大きな溜息を漏らした。」

「やっぱ無理矢理休みを入れて正解だったかな、これは」

「お休み……ですか？」

「つい反応してしまつた私に、プロデューサーは肯定するように一つ頷いて、」

「先日先方がやっと折れてくれました。突然ですみ

ませんが明日と明後日が完全オフになりました。ここ最近ずっと仕事続きでしたし、ゆったりと温泉にでも行ってきたください」

「……………」
 ぱちくりと。

先程と同じように、瞬きを二度三度。

心の中を見透かされたような気がして、思わず驚いて固まってしまった。

「？ 何か都合でも悪かったですか？ あー……泊二日で行くなら今からだだと宿とか空いてないですかね」

「あ……いえ、そういう事ではなくて。というか温泉に行くのは確定なんでしょうか」

「行かないんですか？ 温泉」

本当にそれしかないと思っていたのか、今度はプロデューサーの方が少し驚いたような顔をしていた。

貴方の中の私は一体どういふ存在なのでしょう、と聞いてみたくなっただけで、そっと胸の内に仕舞っておく。

「確かに、暫く温泉にも行けていませんでしたし、

素敵な提案だと思っています。でも、折角頂いたお休みですし、もう少し考えてみようかと」

「なるほど……。まあ明日と明後日は突然呼び出しがかかる、なんて事もないと思いますし、ゆっくり休んで、リフレッシュしてください」

これからまた忙しくなりますから、と締めて、プロデューサーがテーブルの上に広げていた資料を片付け始めた。

「あの、打ち合わせは……?」

「とりあえず来週分は最初の方で打ち合わせた通りですよ。楓さんが聞いてなかったのはオフに関係する部分だけですし、その辺りはまた休み明けにでも」

「ちゃんと聞いてましたよ。優等生の妹とそのお兄様の話ですよね」

「だからこれっぽっちも掠ってませんってば」

立ち上がったプロデューサーが、笑いながら場を後にする。残された私は一人その背中を眺めていたのだけれど、電話を取ったプロデューサーがバタバタと部屋から出て行ってしまおうと、それも終わって